

# 新規制基準に事実上合格した六ヶ所の核燃料再処理工場 虚妄の核燃料サイクルに 税金と電気料金を注ぎ続ける愚

着工から27年、試運転失敗から12年。日本原燃(青森県六ヶ所村、増田尚宏社長)の  
使用済み核燃料再処理工場が運転できる見通しはまったくない。  
原子力船「むつ」、高速増殖原型炉「もんじゅ」を超える核開発の遺物。  
核燃料サイクルは完全に破綻している。

鎌田 慧

再処理工場の全景。

青森県六ヶ所村。使用済み核燃料再処理工場。横に広い正門前に立つと、かならずといつていいほど、寺下力三郎元村長の無念の声(うしろさちろう)が聞こえてくる。無念という言葉は湿っぽい感じではないが、どこか突き放したような、客観的なもの言いをする人だった。

「ここはジャガイモの原産種農場だったんです。農業振興ということで、村有地を国に譲ったんです。そして、国が核燃料工場にしてしまったんだ」

国有地が村有地に払い下げられた、というのではない。逆に村有地を国に提供させられ、農業試験場がつけられた。夏でもヤマセ(偏東風)が吹きすさんで寒く、稲作はできなかった、ひよろ長い太平洋沿いの村。ここで開発されたジャガイモの種が農家の収入をふやす。希望の農場だった。寺下さんが助役のときの朗報だった。

ところが、村長に就任した1969年、国の新全国総合開発計画(新五総)が発表された。村は「むつ湾小川原湖開発」5500ヘクタールの真ん中に設定されていた。代替え地なしの立ち退き強制、村民に酷い条件を突きつけた巨大開発だった。

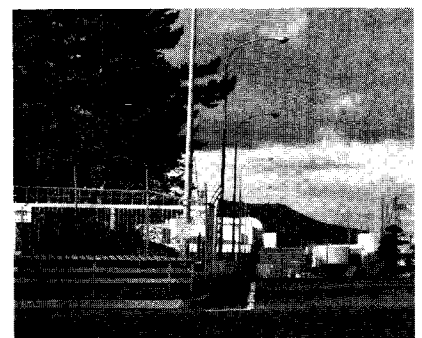
そのなかに国有地にされた原産種農場は、いつていた。個人の農家が買取に反対したとしても、国

有地が国策に反対する訳はない。開発反対の先頭にたった寺下さんにとって、助役時代の譲渡は痛恨の決定だった。最初から再処理工場を中心とする「核燃料サイクル」が、村有地改め国有地のこの畑地を狙っていたのであろうか。

## 猛毒の巨大饅頭

核燃料サイクル施設建設の発表は84年4月20日。電気事業連合会(電事連)の正副会長が青森市を訪れ、ホテルに県知事呼びつけ、正式に立地表明。5500ヘクタールもの農地や住居が買取されていた。しかし、それまでの15年間、石油備蓄基地として石油タンクが51基も並べ立てられただけだった。その「虚大怪発」(巨大開発への寺下さんの表現)の工場の代わりに、ようやく顔をだしたのは、巨大な猛毒饅頭(まんじゅう)だった。

六ヶ所村の核燃料サイクルの歴史



日本原燃の正門前。